

筆跡鑑定と年代測定による古筆掛軸の筆者特定
A writer identification of the old hanging scroll by handwriting analysis and the
generation measurement

長野修二郎
Shujiro Nagano

知多歴史民俗研究会
Chita Rekishi-Minzoku Kenkyuukai

Abstract

The author of an ancient hanging scroll called "Issiki Zenmon toubun" transmitted in the old temple JIUNJI in Okada, Chita-city is investigated. This is a memorial address sent to Norimitsu Isshiki who was a feudal lord of Chita Peninsula and also the famous military commanders of the Muromachi age, however the writer of this address is unknown. The elucidation of this mystery is an important subject as local cultural assets. We consider which the actual writer is Buddhist monk cum waka poet "Shoutetsu" or his pupil "Shouhan", and judge it with both ways of the handwriting comparison and the ¹⁴C dating method. That is an indirect judgment method with the substitute of an actual works, because this method is a destructive inspection.

As the result of both measurements, "Shouhan" is identified as the writer of this hanging scroll. The treasure mystery of past 300 years has been cleared, and a way of recognition as a local cultural property has been opened.

Keywords: Shoutetsu;Shouhan;Issiki toubun;handwriting analysis;¹⁴C dating

キーワード: 正徹;正般;一色悼文;筆跡鑑定;放射性炭素年代測定

1、はじめに

知多市岡田の古刹慈雲寺には「一色禅門悼文」と呼ばれる古い掛軸が伝存する。足利幕府の重臣で知多半島の領主であった一色範光の歿時に送られた追悼文である。送り主は一色太閤で、掛軸筆者は歌壇の巨樹で能筆家の「徹書記」と言われている。

中世の著名人ゆかりのこの掛軸はすでに尾張藩地誌「張州府志」等でも紹介されており地元では話題の寺宝である。

ただしこの掛軸の作者、筆者については時代的な矛盾も指摘され未だ謎に包まれている。

最大の疑問は悼文の原作者は果たして一色太閤で正しいのか？ 掛軸の筆者は徹書記(正徹)で正しいか？ の2点である。

今回当「知多歴史民俗研究会」ではこの点につき新しい裏付け手段の開拓と新事実の発掘で実体解明を進めて来た。悼文原作者に関しては前報において報告したところである。

本稿は後半部 “掛軸筆者の特定” について筆跡鑑定と年代測定を中心に調査した結果の報告である。

2、問題点の再認識

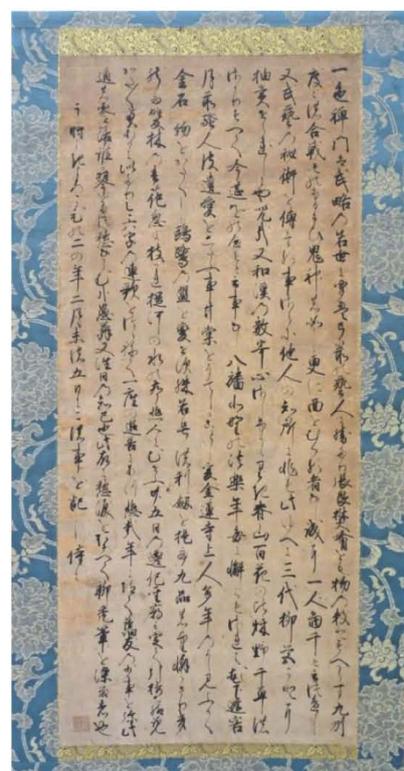
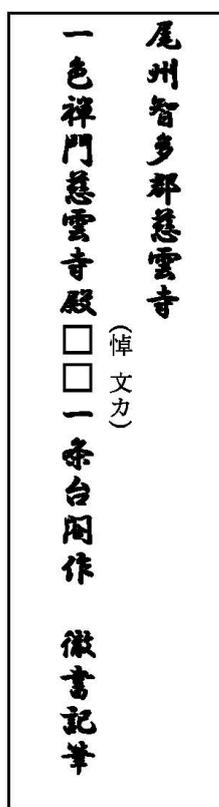
現品掛軸の詳細観察の結果、作者の特定につながる情報としては以下の2点であった。

i) 本紙文面(写真-1)には筆者の署名(落款)はなく、文末に角印「正般」が確認される(写真-2)のみである。これが揮毫者の落款印かどうかは定かではない。

ii) 「掛軸の表面には外題が貼られ、別筆跡で一條台閣作」、「徹書記筆」の表記がされている(図-1)。「一條台閣作」とは「一條兼良が悼文原文を書いた」と解釈、「徹書記筆」とは、「徹書記が掛軸用に揮毫した」と解釈できる。

以上から掛軸の筆者としては印形主「正般」か外題の「徹書記筆(正徹)」のどちらかであろうと考え、両者に絞って真贋鑑定を実施した。

なお 悼文作者「一條台閣」については作者ではありえない。ことは前述の通りである。



(図-1)一色悼文掛軸外題

(写真-2)正般印

(写真-1)一色悼文掛軸本紙

3、掛軸筆者の特定

3-1 筆者候補の想定

この掛軸を揮毫をしたと想定される第一候補は従来本命と目されている「徹書記」(正徹)である。現品外題にも筆者として記され、既存史料においても例外なく徹書記としているとこ

(表-1)一色悼文掛軸関連文献・古記録と例

No	出典	悼文作者	筆者	年代	記録元	
現品	本紙	正般印		1450年前後		
		外題	一條台閣	徹書記		?
1	師崎之記	悼文掲載	一條太閣	徹書記	1700年頃?	個人記録 野口所左衛門
		寺紹介	一條兼良			
2	張州府志	悼文掲載	二條禅閣	正徹	1752 宝暦 3 年	尾張藩出版 松平君山他
		寺紹介	二條大閣	徹書記		
3	張州雑誌	悼文掲載	一條台閣	徹書記	1778 安永 7 年	尾張藩出版 内藤東甫
		————	————	————		
4	尾張志	悼文掲載	一條兼良	徹書記	1843 天保 14 年	尾張藩出版 深田正韻他
		寺紹介	二條良基	正徹		
5	尾張国 知多郡誌	悼文掲載	一條兼良	徹書記	1893 明治 26 年	愛知県出版 田中重策
		寺紹介	二條良基	正徹		
6	岡田村 古代沿革史	悼文掲載	一條良基	————	1895 明治 28 年	個人記録 竹澤保太郎
		寺紹介	一條良基	正徹		
7	知多市誌		一條兼良	————	1981 昭 56 年	知多市出版
8	岡田町誌		一條台閣	徹書記	1990 平成 2 年	岡田町出版
9	岡田知ろう会		一條良基	徹書記	2008 平 20 年	:研究会会報
10	慈雲寺古 記録	什物目録	一條台閣	徹書記	1885 明治 18	慈雲寺 10 世
		軸箱書き	一條台閣	徹書記	1892 明 25 年	慈雲寺 11 世

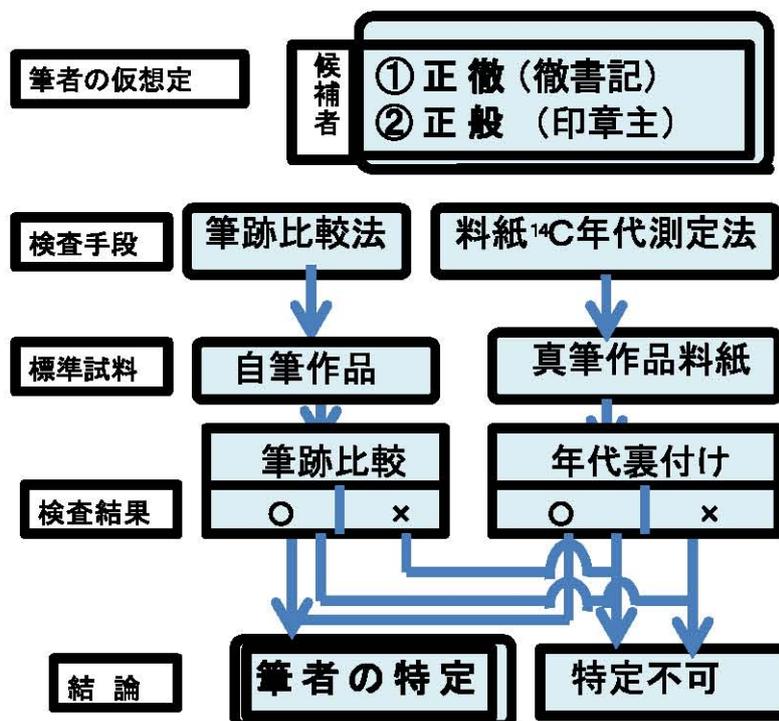
ろである(表-1)。
第二候補としては掛軸本紙の角印主「正般」である。正般は室町中期に正徹の愛弟子で歌僧、能書家として知られた人物である。

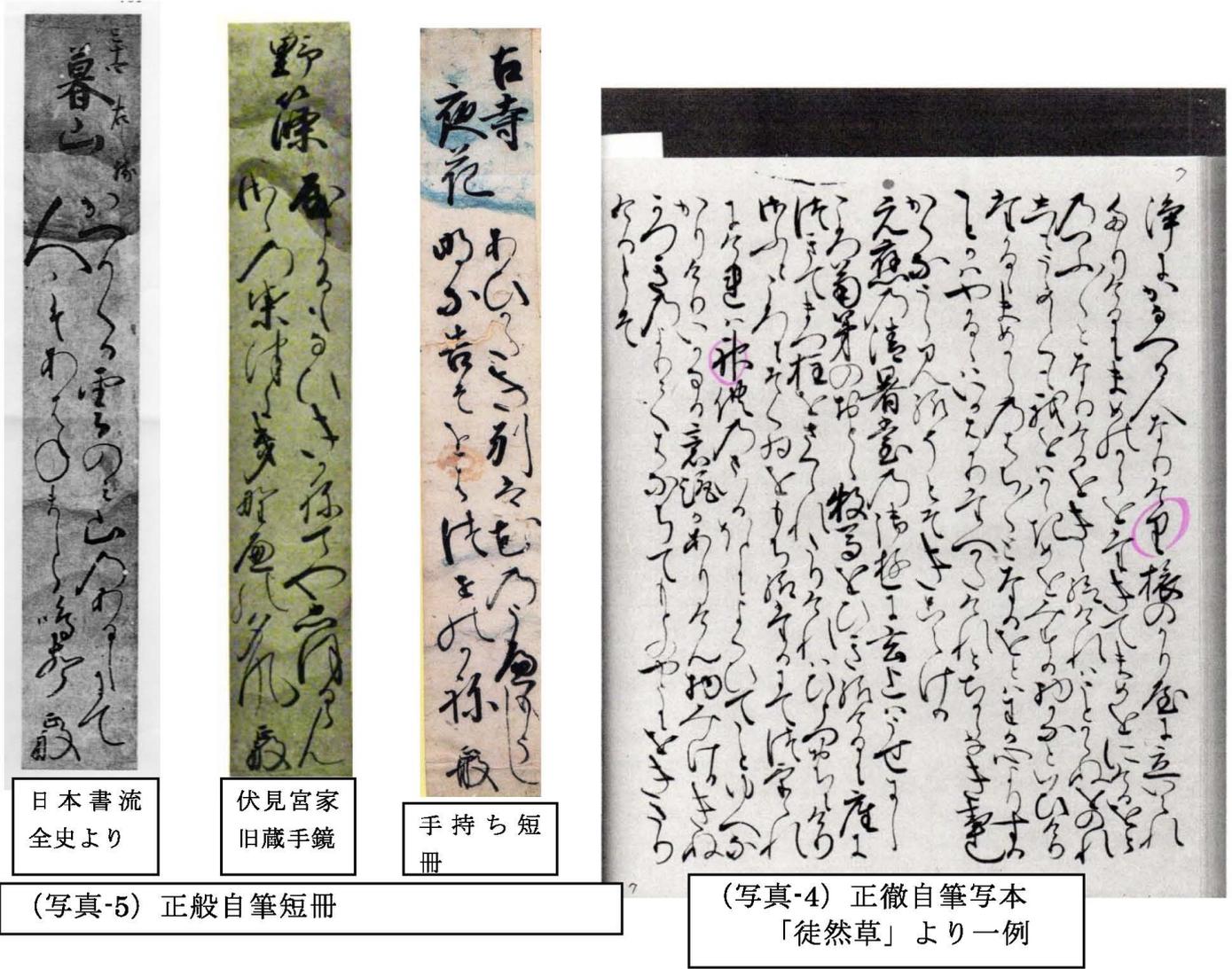
3-2、筆者鑑定方法
鑑定作業は筆者と想定する両人物の自筆作品を資料として、筆跡比較と資料料紙の年代測定結果の両面から併せて判断する方法とした。このためには自筆作品としてはすでに公知されたものまたは自筆署名の入った作品を厳選した。

また年代測定は破壊検査となるため現品からの直接サンプリングを避け犠牲用試料として真筆作品を代用する間接鑑定方式とした(図-2)。

筆跡比較方法は鑑定資料と自筆資料双方に共通する文字を抜粋して比較する「筆跡異同診断」と呼ばれる方式である。筆跡鑑定の資料は、正徹の場合は代表的な自筆作品「徒然草」を選び、一方正般は自筆作品が極端に少ない中で署名入りの和歌短冊を選定した(写真4)～(写真5)。

(図-2)筆者鑑定方法





3-3 筆跡鑑定結果

抜粋文字 30 点について比較し類似性及び相違性の確率で総合判定した(表-2)。結果は正徹の筆跡は悼文本紙筆跡とは「異質な筆跡」と判定され、正般の筆跡は悼文本紙筆跡とは「同質な筆跡」と判定された。

(表-2) 筆跡鑑定結果

	正徹	正般	備考
抜粋文字数	30	30	
判定内訳	類似性あり	6	写真-6
	類似性も相違性もなし	20	24
	相違性あり	10	0
総合判定	異質である	同質である	

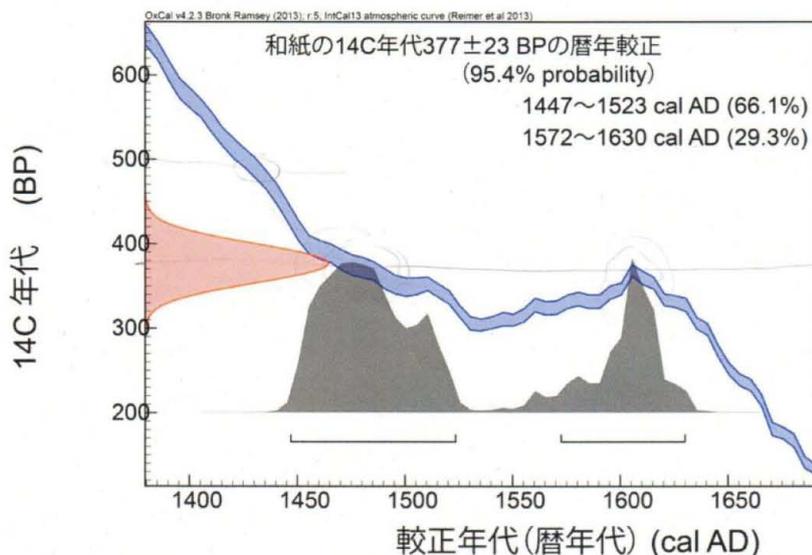
抜粋	鑑定文字 (悼文文面より)	対照文字 (自筆短冊より)
乃		

3-4、正般短冊料紙の年代測定

筆跡比較で同質と判断された正般の短冊(写真-5)について、料紙の年代測定を実施した。年代測定は料紙の放射性炭素年代測定法(^{14}C 年代測定タンデトロン加速器)による。結果は(図-3)の如くであり、当該料紙の生産時期は換算年代にして1447年～1523年と推定された。これは歌僧正般(1434～1510?)の活躍時期とよく附合している。

能		
山		
寺		
花		
野		

(写真-6)〈類似性ありと判定された例〉



(図-3) 正般短冊の年代測定結果

4、まとめ

一色悼文掛軸の筆者は筆跡鑑定の結果、落款押印者の「正般」と特定できた。特定根拠は正般自筆作品の筆跡と当該掛軸本紙の筆跡が合致すること。更に正般自筆和歌短冊の料紙年代が室町中期(1447～1523年)の正般の活躍時期と符合することが裏付けられた為である。なお従来定説の「筆者は正徹」ではないことが判明したが正徹(招月庵)門下の正般の筆という意味では「松月庵工房筆」であり一般には「徹書記筆」でも通用するかも知れない。筆者が正般と特定されこの掛軸の正真性が明確となったことで今後地域文化財認知への道が開かれた。

謝辞

この悼文掛軸の出自研究に当たっては所有者慈雲寺の虎溪常典和尚(先代住職)より地域文化財振興の立場から趣旨の合意を戴きました。稲田利徳博士(前岡山大学名誉教授)には中世文学ご専門の側面からご丁寧なる助言と正徹、正般の筆跡影印資料をお送り戴きました。また、増田孝先生(前愛知教育大学学長)には筆跡鑑定の面から¹⁴C年代測定の有効性をご紹介戴き、名古屋大学年代測定センター中村俊夫教授には適用実施面で多々ご配慮戴きました。その他お世話になりました皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 松平君山 「張州府志」 1752年 巻27、p20s 巻30p7
 内藤東甫 「張州雑志」 1778年 p391~395
 深田正韻 「尾張志」 1843年 30, p111 p748
 田中重策 「尾張国知多郡誌」 1893年 巻貳 p54
 竹澤保太郎 「岡田村古代沿革史」 1895年 P8
 知多市 「[知多市誌]」 1981年 p119, p810
 野口所左衛門 「師崎之記」 1700頃
 正徹 「正徹本 つれつれ種」復刻 1972 日本古典文学刊行会
 小松茂美 「[日本書流史]」 1970年 p121
 田村鑑定調査 [筆跡異同診断書] 2014年 p1
 早川佳宏 「知多歴史民俗研究会資料」 2010年 8月
 長野修二郎 「知多歴史民俗研究会資料」 2014年 2月

日本語要約

知多市岡田の慈雲寺に伝来する「一色禅門悼文」と呼ばれる掛軸について、この作者、筆者を探求している。この掛軸は室町期の有名な武将で知多半島の領主であった一色範光に送られた追悼文であるが筆者が謎であり地域の文化財としてもこの解明は重要な課題である。当研究では悼文筆者と目される歌僧「正徹」とその弟子「正般」の2人を候補とし、自筆作品の筆跡比較と¹⁴C炭素年代測定の両面から判定した。特に破壊検査による現品のダメージ回避のため別途筆者真筆作品で代用する間接鑑定方式とした。結果は筆跡、年代とも完全整合する「正般」が悼文掛軸筆者と特定できた。これにより 300 年来の寺宝の謎が氷解し地域文化財認知への道が開けた。